

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2441 号

Comparison of Clinical and Angiographic Outcomes After Bare Metal Stents and Drug-Eluting Stents Following Rotational Atherectomy

(ロータブレードを使用した薬剤溶出型ステントとベアメタルステント留置における長期予後比較)

田村 浩 (たむら ひろし)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、バルーン形成術が困難な進行した高度石灰化病変を有する冠動脈硬化症において先行したロータブレードの使用がその後のステント治療にどのように影響を及ぼすかを BMS 並びに DES のそれぞれに分けて長期予後を比較した。406 人の患者をレトロスペクティブにその患者背景、病変背景を調査、その予後を長期間にわたって経過観察した。多くの研究が 1 年間の観察期間であるのに対して、平均観察期間が 4.6 年間という長期に渡り経過観察を行なった。また治療後 10 ヶ月後にアンギオの評価を行なっているが、その率は BMS、DES 共に 75%と海外の報告では実施し得ない高いフォロー率であった。先行研究で高度石灰化病変は予後が悪く BMS 時代では単純な病変に対して有意に総死亡、急性冠症候群、標的血管再血行再建術 (TVR) などの主要有害心血管イベント (MACE) が多いことが示されているが、本研究では DES を使用した際には高度石灰化病変であったとしてもロータブレード先行使用すれば長期予後改善効果が見込まれることを示した。通常 DES は再狭窄を低減させるだけと考えられているが今回の研究では MACE まで改善していることが示された。このメカニズムは高度石灰化病変をロータブレードが病変形態を改善させて DES を適正に留置するために効果をあげていることが示唆される。本研究により複雑性高度石灰化病変に対するロータブレードを先行したのちの DES による冠動脈形成術は DES の種別には関係なく BMS に比較して安全で長期予後に対しても効果的な治療であることを示した。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。